

上古神池島庭園の地割構成

大田征六

(造園学研究室)

Received July 1, 1985

Site Organization of Japanese Sacred Pond and Island Garden in the Ancient Age

Seiroku Ota

(Laboratory of Landscape Architecture)

Natural space is arranged as the basic structure for garden site planning. It can be reasoned and structured from perceptible "situation" space. Whenever we go through a garden, situation space will occur. Reversely, if we operate situation space, we can structure the garden.

The sacred pond and island garden was planned as the place where the ancient people looked at and devoutly worshiped the sacred area for ancestor. Situation space is composed of both view point set and objective point set in the sacred garden. View point area, where view point set is located, frames a garden scaffold, from which the sacred area for ancestor, "there" of objective point set, is observed.

In this paper, three sacred gardens were analysed by the behavior of situation space, so that the characteristic structure of natural space was found out there. Three perspectives were distinguished among those gardens.

緒 言

日本庭園史は、その多くが、「日本書紀、推古天皇20年(612)の条に、百済国から漂着した路子工が皇居の南庭に須弥山の形を造り、呉橋を造った」という記述で始まっている。飛鳥時代以前については、その記録が不備なことも手伝って、庭園史研究が極めて乏しいのが現状である。その理由の一つに庭園に対する考え方が影響しているように思われる。庭園はその属性である観賞性によって判断されることが多いが、むしろ庭園の普遍性は自然を取扱うことに由来する自然空間に求めなければならない。本稿では、上古を弥生期から古墳期として考えているが、そのような時代に宗教を生活や文化から、今日的な考えで、切り離すことは許されず、この時代の所産である神池島も、それがたとえ宗教性の強いものであったとしても、一種の文化複合体として、広い視野の中でとらえなければならない。

本稿では、神池島が庭園であるという角度から、その神池島庭園の構造を基本的に規定している自然空間に着目し、まず初めに、分析の方法論として、その理論的検討を試み、次にその事例分析を行なった。

文化ストレスと環境造庭

屋前^{ゑきまへ}や庭の起源として「ニワ」があり、それは古代の共同体の領分として、今日われわれが環境という言葉で理解する内容に近いものと考えられる^{*)}。神池島庭園が「ニワ」であったことの意味は農耕生活環境の広がりとしてであった。まだ文字や記録の未発達なこの時期

に、同じ自然を取扱う農耕生活の中であって、何か一つの観念を自然風景として創造することは最も素朴な、必然的な表現行為であった。神池島は当時の人々の、生活全般との関連における、環境の空間的広がりとして、日常活動に組み込まれた環境造庭の所産である。

神池島庭園では祖霊が眺められ、祭祀された。当時、まだ縄文期から引継がれた呪力信仰が支配していた。しかし、すでに採集生活から脱して農耕を開始していた弥生人の自然観は、前代に比較して一層、積極的なものであった。「カミ」の観念も、その内容が豊かになり、それまで自然と同化的で、それとの間に区別がつかなかった「カミ」が、次第に独立して、抽象的実体を持ち始めた。人々は特定の山や木の中に宿る「カミ」を眺め、祭祀することで、「自然が鎮まる⁹⁾」と考えた。しかし、この段階では「カミ」はまだ人格的性格を帯びていない。人格神像の設定やその神社祭祀の様式は6世紀頃の出来事と考えられるから、神池島発生はそれ以前のまだ「カミ」が自然を依代^{よりしろ}として宿る時代の出来事と考えるのが妥当であろう。何故なら神池島はその起源に自然池や農耕池に宿る「カミ」への祭祀が関係しているし、自然を取扱い、その中に「カミ」を内在させる神池島の造庭それ自体が人格神以前の、まだ精霊的な「カミ」の観念にもとづいた作事であるからである。

神池島の祖霊は海景の姿で迎えられた。古事記、上巻終りに「ミケヌノ命は、立ち騒ぐ白波の穂を踏んで、海の彼方の常世国に渡って行った。……」とある。当時、常世国に祖霊が住んでいるものと考えられていた。民族渡来の歴史観である。一方では、常世国は人々の海の水平線に対する神秘的な印象に支えられていた。海景は、こうして神池島庭園の祖霊神域として、象徴的に縮景された。また、このような神池島庭園を眺め、祭祀することは、それが自然材料によって構成された完全な宇宙の構図であることの故に、人々はそこでは宇宙に所属している自己の位置を理解し、またそれが「自然を鎮める」ことの意味で、人々の生存と生活に安定を与え、さらにそれが生活に必要な祭祀の場所ということで、人々の道具環境の広がりとなった。こうしたことが、自然を取扱う環境の、新たな動機的な力、つまり、文化ストレスとなったことは明らかである。

地割構成の理論的検討

1. 状態空間と〈PLAN〉の心像的方法

B. ラッセルによれば「もしわれわれの感覚が物的対象によって引き起こされるのだとすれば、これらの対象とわれわれの感覚器官と神経と頭脳とを含む物理的空間というものがないと注意することが大事である」ということであるが、われわれの身体と対象との間の相対的な位置関係によって物理的空間は異なり、われわれの対象から受ける感覚もそれに左右される。物理的空間はわれわれの知覚の背後にあり、それはわれわれの感覚と件の相対的な位置関係としてある知覚空間とは対応はするものの、同じものではない。庭園分析では主に事物や出来事の形態認識に関わるので、この知覚空間を状態空間(situation space)と呼ぶことが出来る。一方、庭園では推論的に決定可能な全体的自然に関わるから、そのような物理的空間をここでは自然空間と規定する。なお、このような空間の2分法は、ラッセルでは私的な空間と公共的物理空間、心理学者ジョージ・A. ミラーでは知覚空間と概念的空間、同じ心理学者U. ナイサーでは対象図式と認知地図とに分類している。

状態空間は庭園では視点や地物点の点集合からなり、地物(点)を眺めるという体験によって成立する知覚者の視点様式(知覚者の位置とそこでの肉体的状態)は、したがって、地物点とその周辺に生起する出来事と不可分に結びついている。なお、ここで知覚の基本的性質から考えて、知覚の「ここ¹⁰⁾」が意識の焦点となることに注意しなければならない。状態空間においては、地物点の「あそこ」の出来事は、視点の「ここ」の出来事(=知覚者の視点様式)

との関係において知覚される。特に、視点の「ここ」を空間的対応関係の中で中心的に位置づけているのが庭園の最大の空間的特質である。

神池島庭園発生期の自然観は「カミ」が自然に宿る、いわば、実在的自然観であり、その意味では個人としての人間は何ものでもなかったが、そのかわり人々の共同体的意識の中で普遍化されていた集合的心があった。庭園の状態空間としては集合的心の視点集合があり、一方では、地物点集合があった。「カミ」は集合的心の意識に指定された「カミ」である。造庭者は集合的心の持主か、少なくともその理解者でなければならない。その意味では上古では司祭者が造庭者となり得た。集合的心とは何か。抽象的実体である「カミ」を自然に眺める心である。人々の感覚与件の背後にあって物的配列を操作している自然空間を、状態空間を介して推論出来る心である。この時期、池、山、森は「カミ」の依代であった。造庭者はそれらの場所で「カミ」に感動し、拝礼する。集合的心の持主である彼は、自らの視点様式を、この神聖な体験(状態空間の成立)にもとづいて、自覚し、表象する。もし、視点様式の表象(特に、その視点の位置選定)がなければ環境造庭の〈PLAN〉は始動しない。神の依代である神体山の頂上を眺める視点が、その空間的要素の中で、位置設定される。そこで、その視点から他の視点集合要素への空間的順序関係、配列が決定される。つまり、点、線、面の図形心像として視点集合が構造づけられ、そこは造庭者の視点場所となり、視点様式もそこで展開される。こうして庭園の足場が設定されると、そこを規準として座標も選べる。視点が決まれば風景も鮮明となり、状態空間が配列される。いいかえれば、構造化された視点の「ここ」から、「あそこ」の領域がそれぞれにオフセットされ、そこに風景がはめこまれ、状態空間に基づく〈PLAN〉操作がそのことによって可能となる。

ピアジェによれば、「心像は能動的な内在的な模倣によって発生するものであり、その再生の実行過程では予想的図式は含まれている⁹⁾」とする。それゆえ、現地を観察した後、造庭者が記憶を頼りに〈PLAN〉する際には心像の方法は有効であり、また上述の視点の表象からはじまる心像的方法は一種の「場所づけ法¹⁰⁾」と理解出来るもので、本稿の庭園分析に用いた方法である。

集合的心の視点場所は池島風景全体を視野に納める場所、つまり、庭園の中心、高所、見通し点、外周などにあることが必要であった。また、集合的心にとっての神池島風景は、単に池島に対する感覚与件の現われとしての風景ではなく、それから推論された、しかも、祖霊の住む海景と同定された、自然空間としての風景であった。これが神池の海景摸写の意味であり、その自然空間の物的配列操作に際しては、遠近法則、プレグナンツの法則、推論的構造が用いられており、その縮景過程においては、海景の感じを保存する、いわゆる「移調」の原理が使われている。

「ここ」と「あそこ」の領域の分離は「あそこ」の領域の空間の神秘性を高めることになり、神池島庭園は祖霊祭祀が主なる内容となる。

なお、観賞者の視点集合は庭園全域に対する俯瞰遠望によって規定されており、したがって、その位相的構造は造庭者の視点集合に対する祖霊神域の関係と同じ分離公理が成立する。ただし、観賞者の視点様式は、神池島の庭園立地には影響をおよぼす(その多くが山麓部に立地するなど)が、その神池島としての神域的性格からして、その内部の地割構成には、造庭者の視点様式ほどの影響力はない。

2. 発生的地割構成

神池島風景は海景摸写によって実現する。しかし、それ以前の段階では、池の風景はそこに住む精霊である自然神への風景として、眺められ、祭祀されていた。それがやがて、環境

造庭的な観察の対象となった。そこで、次のような諸段階が考察出来る。

(1) 池があり、水面を観察、相観する。(ここで、相観 *physiognomy* という用語を用いるのは、それが状態集合の様相を観察するという、特別の目的をもつためである。) この行為は対象領域にやがて位相が導入される最初の「下見」である。この段階では対象領域はまだ抽象的空間にすぎない。水面の広がり、神秘的な霊気など、感覚と件が漠然と知覚されている。

(2) やがて、水面の広がり、その背後にあると考えられていた池の「カミ」が同定される。対象領域は池水面にあり、しかし、その境界は明示されていない。ここで、筆者が別稿⁹⁾で植栽空間に導入し、また、原が建築的〈PLAN〉に設定した³⁾、位相空間が、この段階で適用可能となる。つまり、池島、水面は空間モデルとして図形化され、環境造庭的な〈PLAN〉の対象となる。ここで対象領域に属する点の集合を $X (\neq \emptyset)$ であらわす。 X の部分集合を E とし、点 $x (x \in E)$ の近傍を U であらわす。 U の全体を x の近傍系 $\mathfrak{A}(x)$ とすると、仮定によって $\mathfrak{A}(x)$ は位相の条件を満足している。 $\mathfrak{A}(x)$ の決め方によって、 E の位相 τ がさだまり、 (E, τ) は位相空間である。なお、 $\mathfrak{A}(x)$ の部分族 $\mathfrak{B}(x)$ は点 x の近傍基底となる ($\forall U \in \mathfrak{A}(x), \exists V \in \mathfrak{B}(x) \rightarrow V \subset U$)¹⁰⁾。

池水面は集合的心がその水面域の背後に「カミ」を眺めることによって神域となる。この神域は位相的には開集合 O を形成する。ここでは水面の広がり状態空間は、近傍基底 $\mathfrak{B}(x)$ となり、知覚野を占有している

($\forall x \in O, \exists V \in \mathfrak{B}(x), V \subset O$).

この状態空間の、何も無いこと、無限なること、自由なることの感覚は集合的心の意識にとっての神であり、注視に対応する水面点は広がり状態に場所を占めている (Fig. 1).

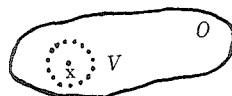


Fig. 1 Natural space of pond.

(3) 池水面が海景と同定される。つまり池水面に海の「カミ」、祖霊が迎祀される。その時、池水面の風景に中島が発生する。海島は民族の水平渡来の根拠地であり、祖霊の在す場所である。島が発生すると水面に浮かぶ島の形姿に関心が集中する。水面は、大海原、無限なるものとしての背景であり、島では視野が限定される、あるいは池水面の自然神から池島の祖霊への意識の変化など。水面 (素地 *fond*) に対して、島の形姿 (図 *figure*) は形態の心理学の観点からは全体的な構図すなわち〈ゲシュタルト〉¹¹⁾を構成し、それは各々の知覚野の全体と連帯し、性格づけられて、対称、比例、規則性などの幾何学的諸法則に従って組織化される。ここではゲシュタルト心理学者がユークリッド的に扱った諸法則を位相幾何学的な観点から眺めてみる。空間知覚における諸点の間の「近さ」の観念は位相幾何学においては基本的である。島はその汀線によって水面から区別されてはいるものの、知覚的にはそう簡単ではない。さざ波が打ち寄せる中島の汀線は水面と島の地形との豊かな融合であり、集合的心の意識にとっては島の神域を

象徴させるのに必要な境界を形成する。つまり、現前している、たとえ単純に輪郭づけられたユークリッド的な諸形姿も、空間知覚の諸点の関係としては、より複雑な仮想的曲線を描くことになる。知覚は、このような諸

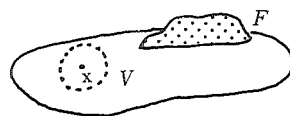


Fig. 2 Natural space of pond and island.

点を結びあわせるのにゲシュタルト心理学者の〈プレグナンツ〉の法則⁴⁾に従いながら、「近き」の成立によってその形姿を整える。この時、島はその汀線の諸点の知覚的特質によって、位相空間 X における閉集合 F を形成する (Fig. 2)。

島が神域であることがさらに強調されるのは、島の周辺に水面の意識されることによってである。神池島庭園では、島の周辺水面を強調するために、島の汀線にあわせて、池外周の汀線が地割されているのが見られる。

(4) 最後に、池島の状態集合と発生的に平衡している視点場所の状態集合 (= 視点集合) を検討する。視点場所は造庭者がそこから庭園を眺め、地割構成を行なう足場である。神池島庭園ではそこは地神神域でもある。地神が祖霊を迎える構図として庭園を把握する。造庭者は地神を敬う集合的心にとってかわって環境造庭を行なう。地神である、生活に親しい山、森、社に宿る「カミ」が、集合的心の意識に措定され、それが一つの象徴的な図形心像となり、地神神域に内在する。視点場所は庭園内では全体を見渡せる場所に位置し、それは島、半島、森として地割され、一般にその視点集合は閉集合 H を形成する。視点場所 H と祖霊神域 F は、両者の間に水面上で距離をとること、あるいは各種の遠近法操作が介在することなどによって、分離された空間として配列される ($F \cap H = \phi \rightarrow F \subset O_1, H \subset O_2, O_1 \cap O_2 = \phi$)。

事例分析

1. 吉備津神社神池島 (所在地、岡山県岡山市吉備津931)

吉備津神社の創建は仁徳天皇の御代で、祭神は記紀にもその名がある大吉備津彦命である。重森⁹⁾は神池島の発生は神社創建の頃か、あるいは、それよりあまり下らない頃であると判断している。一方、長谷川²⁾は神池の発生は一般にその上限は3世紀後半から5世紀前半の事と考え、祖神がまだ人格神でなく、靈魂段階の「マナ」的神像でとらえられる時期としている。神池島が自然材料を用いた神域の造庭であるという立場からは、地神、祖神が人格化して常住の場所を神社に見出す以前の時期に、神池島の起源を求めるのが妥当であろう。

造庭者の視点の「ここ」は島

Aにある (Fig. 3)。視点の「ここ」からは吉備中山 (128.3m) の山頂部を南方に見晴す。最初の頃、人々はこの南に位置する神体山に心がひかれ、それを拝礼する。それは自然発生的な知覚の「ここ」であった。これはやがて造庭者の視点の「ここ」に、相観を通じて、移され、さらにそれは神体山の三角状を模倣することでそれ自体を神格化する。島 A に内蔵されているのはこの三角形の図形心像である。なお、それは山頂部と視点場所の中心

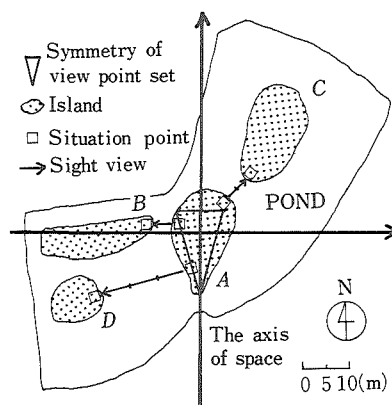


Fig. 3 Site analysis diagram of Kibitsu shrine garden.

を結ぶ直線に対して、線対称の三角形として考えられる。人々によって眺められ、祭祀される祖霊神域はユークリッド的遠近法によって視点場所から区別されている。海景では近く、遠くに島が眺められるのは特殊な風景ではない。同じ遠近法でも当神池のものは距離空間的である。一般に島 X (集合 X) から島 Y (集合 Y) の距離を

$$d(X, Y) = \inf\{d(x, y) : x \in X, y \in Y\}$$

と定義すると、当神池の島 A, B, C, D 、の間の距離関係は次のように配列されている。

$$d(A, B) < d(A, C) < d(A, D)$$

吉備中山の山麓部に位置する当神池は北東から西に曲った形状をなし、その中央、島 A のところでねじれている。島 A に造庭者が立つ時、南方の山頂 (128.3 m) を眺める視野の中に島 B, D は入り、 $d(A, B) < d(A, D)$ は知覚的に納得のゆくものである。そして、その配列、距離感覚を持って方向を転じ、同じ吉備中山 (162.15 m) の山腹等高線沿いに視野を広げる (このような地形の読みは造庭者に重要である)。島 C とその周辺池水域のおよその位置、範囲はこうして定まる。なお、島 C は池水域の中央に位置し、その池汀線は外周池汀線と調和している。つまり島 C は水面の広がり状態空間をその周辺水域に持ち、それ故に島 C は神域を明解に表現している。重森によれば当神池島は出雲系に属し、 A, B, C の 3 島と A, B, D の 3 島がいずれも三角形の平面配島となっており、ここにも神聖な内在が三角形という観念と同定されている様子が伺える。

2. 総社宮神池島 (所在地、岡山県総社市総社731)

「沼田神社記」に「備中國官社之一沼田神社在總社境内 沼田池南涯天神山池水匝波漫々松樹聳而影蒼々古昔此地建沼田神社年代查渺不可得而考也……」⁹⁾とあり、總社境内に沼田神社があり、また沼田池の南涯に天神山がある。そこには池水がめぐって、波漫々、松樹が聳え、その影が蒼々としていた。古い昔に神社が建てられたが、その年代はわからないと云っている。

重森は「吉備の総社は国府が出来て以来の齋祀であり、この地に神池があり、沼田社 (野俣社) の祭祀されたことは更に古い」と述べているが、神池発生期を沼田社が池に住む精霊の屋代として設けられた頃とここでは考えておく。

造庭者の視点の「ここ」は沼田社のある屋代神域にある (Fig. 4)。古くはこの地に沼田があり、池となった。精霊である地主神が屋代に神格化され、池には島を築き、池汀が整えられ、祖霊が迎えられた。屋代神域には屋代があり、それを拝礼する人々の自然発生的な知覚の「ここ」があった。このような知覚の「ここ」は一般には広場のような形態をとることが多いから、造庭者の視点の「ここ」としては、中心点を持ち、周辺に円形あるいは方形に広がる場所として、図形心像が描かれる。これが視点場所 A としてここから祖霊神域が眺められ、祭祀された。視点場所は

「沼田池南涯天神山池水匝」の場所であり、その池辺が半島として地割された。視点場所から祖霊神域を隔てるのは水面の広がり状態空間である。これは島を孤立させ、神域を形成する。この地割の表現が島の池汀線に池外周の池汀線を沿わせていることに見られる。当神池には 3 島あり、各島に対して、それぞれ、水面域が強調されているの

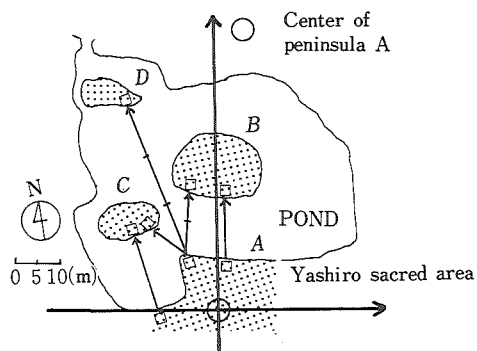


Fig. 4 Site analysis diagram of Sōjagū shrine garden. Symbols are the same as in Fig. 3.

が特徴である、次に視点場所 A は庭園全域を見渡せる場所にあり、そこからの眺めにふさわしく島 B がぼぼ池の中央に安定した姿で浮かんでいるのが印象的である。半島 A と島 B との池汀線が平行していること、両者の間のほどよい距離間隔がそれを一層、強調している。恐らく、〈PLAN〉は最初、この単純な構図から始まったと推定出来る。つまり、池中に3島を配した地割は半島 A と島 B によって形成された自然空間を基本としたものである。重森は「恐らく大島が大歳御祖大神であり、南の小島が大己貴大神であり、北の小島が少彦名大神の島に当ると見てよい。そしてこの三神三島を、品文字に配置構成しているのは、本来大歳御祖大神一座であるが、これは幸魂と奇魂とに分けて二島とし、更に別に少彦名神をまつり、三島三社という風に奉斎したものと見てよい」と述べ、筆者の考えと関連していて、興味深い。

神池島全体は南北に比較して、東西にやや長い諸形の地割をしている。その独得の形は、3島それぞれが水面の広がり状態空間を持った、つまりそれぞれの神域としての分離を表現している。なお平面的に眺めると、3島をそれぞれ中心とする3神域は機械的に結合しているように思われる。しかし視点場所に立って見通すならば、島 D が遠景に配され、島 C、B が微妙に前後して、それぞれ整った姿で水面に配島されている。つまりこの3神域は美しい「池水匝波漫々松樹聳而影蒼々」の風景によって構成されていることを知るのである。この空間操作法を射影的遠近法と呼ぶ。

3. 伊奈富神社神池島(所在地、三重県鈴鹿市稲生町)

伊奈富神社については三代実録に「貞観七年四月十五日乙丑、授伊勢國正五位上稲生神從四位下、從五位上勲七等椿正五位下³⁾」と見えて、当社は清和天皇貞観七年四月に從四位下に叙せられている。創始の事情について、これ以前の確実な史料はないが、当社所蔵の「稲生大明神縁起式」に、「人皇一十代崇神天皇御宇任靈夢詔、占宮所方角、即營宮彼處、使就而居、號是稲生大明神、或曰伊奈富神、又名稻穗社、皆以勅號也、……」と記され、崇神天皇が再三靈夢の告を受け、その勅旨にもとづいて社地選定の上創祀されるに至ったとされている。また「皇大神宮引付」には応永から寛正の頃に当社の諸役が免除されたことが記録されている。こうして、室町時代に至るまでも、絶えず朝野の厚い崇敬を受けていて、その間に朝野や社寺との間に人的交流はあったわけで、伊勢湾近辺の海景がそうした人々の心をとらえていた。もちろん神池島発生期にそのような人々がいたことはわからないが、推論によって、伊勢湾近辺の海景を眺めてみると飛島列島も当神池島のモデル海景として参考とされたかも知れない。当神池島がいつ頃出来たかは重森によるとその直線配島から上古であり、神社草創が崇神天皇の頃と伝えられているところから、神池もその頃と推定している。現在、室町期のものと推定される絵図が当社に保存され、そこに七島神池が描かれているのは記録としては貴重である。

なお、当神池島も祖霊神域を持つ以上、神社草創以前にその起源を見るのが妥当と考えられる。

造庭者の視点場所は森神域である(Fig. 5)。森は地神が住み、後には神社が設けられることも多くなる。森では人々の知覚の「ここ」は広場や道の地割をとる。広場ではとどまり、拝礼する。道では森を巡り、「カミ」へと近づく。

伊奈富神池島は直線式配島である宇佐神宮神池島の系統をひき、後者が宗像三島の摸写的配島であるのに対して、前者は伊勢湾近辺の列島風景の象徴的表現である。しかしいずれもその配島の持つ線型性の意味内容には、渡来民族の島伝いの移動の歴史観が含まれており、それが風土的な海景に同定されて独得の神池島を生み出している。

列島を神域として地割構成しようとする時、森神域の視点場所に対して、線型性と巡る動作の連続性がその図形心像を描き出した。なお、造庭者の視点場所とは別に観賞者の視点場所つまり、観賞場所が神池島北部の丘に求められ、そこからは俯瞰遠望が可能となる。

神秘的な列島海域は、造庭者の視点場所を構造づけたが、同時にその海域の摸写縮景に際しては、その線型連続性はゲシュタルト質として〈移調〉された。つまり列島海域を構成する各島の形態や地割について、その実際的な少しの異同は問題にせず、むしろ海域の神域性を象徴する線型連続性を保つよう配慮して、配島形式が決められた。線型連続性がよく保存さ

れているのは1・1・2・1・1の七島がほぼ一直線であることで理解されるが、それをさらに強調しているのが池外周の池汀線である。まるで七島が線型の一島であるかのように、その周辺に線型水域が設定されている。ここには総社宮神池島に見られたような各島にきわだった水面域は表現されていない。以上のような七島の線型連続性のリズムを認めた上で、部分について少し詳細に眺めてみると各島は(A, B), (C, D, E), (F, G)の3グループに、視点様式を配慮することによって、分類出来る。(C, D, E)は中心領域を形成し、(A, B), (F, G)はその両翼領域である。島C, Dが島の線型軸から上下に分離しているとも見えるが、大きさ、形体、配島から考えると問題にならない。むしろこの分離は配島内容を豊富化している。というのもこの分離によって祖霊神域を象徴する空間原理の1つである三角形配島が線型列島に内蔵されることになり、それが中心領域を一層中心化させ、境際領域(B, C, D)に連続性の機能を与える結果となっているからである。なお、初期の〈PLAN〉に直接関係のない後年の出来事であるが眼洗場(池水が眼病に効くという風習による)が(B, C, D)を三角状配島風景として眺める位置に設けられているのも状態空間への配慮と考えられて興味深い。線型に観察する過程で、集合的心の視点様式にとっては風景の動態が必要である。全体として線型指示が保たれながら、観察過程では海景が想起出来なければならない。中心領域はそのためのもり上がりの場所であり、両翼領域では線型指示が強調されている。当神池は現在でも「七島さん」と呼ばれて村民に親しまれており、その池外周部分にヒノキやスギなどによる、昼なおす暗き小さな森が形成されている。なおその森の縁に沿って池の線型に平行な道が設けられ、その道ゆく人々にとっては森の中に見え隠れする神池島の姿は神秘的な感情をよびさますに十分なものである。

近辺海景がモデルとなって列島神域が摸写され、森神域の中にあたかも神社が設けられるように、それが祖霊の宿る場所として〈PLAN〉された。神社発生以前の原始的な神域形態である。また視点場所から隔った「あそこ」の領域が、視点場所である森神域の「地」に対する、列島神域の「図」の関係として、単純に構図化された。これを他の神池島の空間遠近法と区別する意味でここでは心理的遠近法と考えている。

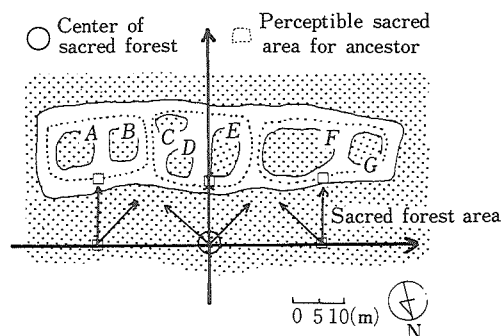


Fig. 5 Site analysis diagram of Inabu shrine garden.
Symbols are the same as in Fig. 3

摘 要

庭園の地割構成の基本には自然空間への配慮が見られる。自然空間は、知覚的な状態空間

によって、推論され、その構造が決められる。われわれが庭園を体験する時、状態空間は生起し、逆に言えば、状態空間を操作すれば庭園が構造化出来る。

神池島庭園は上古の人々が祖霊神域を眺め、祭祀する場所として設けられたものである。状態空間は神池島庭園では視点集合と地物点集合の両者から構成されている。視点集合のある、視点場所は庭園の足場となり、そこから地物点の「あそこ」の領域である祖霊神域が観察される。

本稿では3つの神池島が状態空間のふるまいに基づいて分析された。その結果、それぞれに特徴的な自然空間が見い出された。つまり3つの遠近法景観がそれらの庭園の間で区別された。

謝 辞

筆者の造園原論研究に歴史的教示を与え下さった京都大学教授中村一先生、文献等の研究的配慮を戴いた岡山大学教授畔柳鎮先生、貴重な古絵図、文献を見せて戴いた伊奈富神社宮司吉田義隆氏に感謝する。

文 献

- 1) B. ラッセル：哲学入門，36，角川文庫，東京（1975）
- 2) 長谷川正海：日本庭園の原像，164—172，白川書院，京都（1978）
- 3) 原広司：近傍概念と空間図式（記号学研究2），64，北斗出版，東京（1982）
- 4) ジャン・ピアジェ（田辺振太郎他訳）：発生的認識論序説（第Ⅰ巻数学思想），203—204，三省堂，東京（1975）
- 5) J. ピアジェ，B. インヘルダー（久米博他訳），心像の発達心理学，19，国土社，東京（1983）
- 6) 中村一：日本造園学会関西支部発表要旨，19，（1975）
- 7) 大田征六：日本造園学会関西支部発表要旨，1，（1983）
- 8) 大田征六：植栽図式の史的分析（関口鉄太郎記念論文集），養賢堂，東京（1985秋出版予定）
- 9) 重森三玲：日本庭園史大系（上古，日本庭園源流 1，31），社会思想社，東京（1975）
- 10) 竹之内脩：トポロジー，広川書店，東京（1982）
- 11) U. ナイサー（古崎敬他訳）：認知の構図，145，サイエンス社，東京（1982）
- 12) A. N. ホワイトヘッド（藤川吉美訳）：科学的認識の基礎，110，理想社，東京（1980）
- 13) 式内社調査報告第7巻，東海道2，皇学館大学出版部。